

# 組合士 アラカルト

全国トラック交通共済協同組合連合会

いじましげお  
飯島茂男さん

## 自らの立ち位置を確認し、会員サービスの展開を目指す

「組合士という資格取得のための勉強を通じて、自分の立ち位置や所属する団体の意義を改めて確認することができました。そこから、会員のみならず、さらに、その先にいる事業者のみならず、従来以上に当組織を活用してもらえようというサービスを展開することを探るようになっていきます」

「組合士になったこと」が自らに及ぼした影響をこう語るのは、全国トラック交通共済協同組合連合会（交協連）の飯島茂男さんである。

### 職業人生のベースづくりこそ

「組合士という資格は以前から気にはなっていた」と言う飯島さん。一昨年、事務局の若手職員に向けて、「組合士の資格取得をバックアップする」と役員から発破をかけられたことが「最後の一押し」となった。試験勉強の間は「仲間がいたことが適度の刺激と張りになった」そう、わからないところがあれば互いに質問したり、東京都中央会が開催する講習会を利用するなどして準備を進めたという。

その経験を通じて、「10年早く挑戦す

ればよかった」と飯島さんは言う。「日常業務の中では協同組合という組織・制度的な勉強までは手が回らないし、協同組合とは何か、どういう存在か」を周りの先輩等から教わったり議論する機会も少ない」中、組合関連の法律を真正面から勉強することなどを通じて、自分が所属する組織の意義や基礎をきちんと知ることができたし、その結果、仕事についての幅や厚みが増したと感じている。だからこそ、「組合士の勉強は入職したばかりの若い人にこそ必須だと思おう」と言う。

飯島さん自身、「交協連という組織の拠って立つ意義がわかると、仕事の見方が変わってきた」とのこと、従来は損保会社との競合・競争への対応に目が向きがちだったけれど、協同組合法の勉強を通じて、営利会社と交協連のような組織の根本的な精神の違いが明確になると、例えば、入職以来10数年にわたって担当してきた「交通事故防止」の事業についても、会員や会員組合員であるトラック運送事業者側の視点に立って、「組合組織だからこそできるサービスは何か」という考え方をするようになった

と自らの姿勢の変化を指摘する。

### 「日常の便利」を支える組合員を支えたい

飯島さんの所属する交協連は、北海道から九州までの15のトラック交通共済協同組合を会員とする。会員組合はトータル約1万8000のトラック運送事業者を組合員とし、対人・対物・車両・搭乗者・自賠責の共済事業を行っている。契約車両数は、約298,500両で、営業用貨物車両数の実に4分の1のシェアを占めている。交協連は、その会員共済事業をさらに補償する再共済事業、自賠責事業及び事故防止事業を主要事業としている。

その中でも、昭和47年の設立以来、力を入れてきているのが交通事故防止事業である。ネットショッピングや通販が生活の中で日常化した今日、「頼んだものは翌日届いて当たり前」となっているが、その「当たり前な便利」を支えているのが交協連会員傘下組合員であるトラック運送事業者である。その現場ではかなり厳しい業務環境も現れており、全体として漸減の続く交通事故の中でトラッ

ク事故に関しては漸増傾向が見られる。それだけに交通事故防止事業はますます重要性を増し、会員職員への研修の他、映画（DVD）やカレンダー、垂れ幕の作成など、交通安全意識の向上に向けた安全運転に関する広報事業にも力を入れている。

交協連会員傘下組合員の大半は中小零細規模である。そういう事業者が今、何を求めているのか、そういう事業者を束ねる会員組合が今、何を求めているのか、「交協連は全国組織。現場を知る機会は多くないけれども、全国組織だからこそ知る必要がある。ここを進化させ、深化させていきたい」と飯島さんは考えている。「組合は元々、組合員である事業者自らがつくった制度なのだから、もっと利用・活用するという意識を喚起したい。そんなお客様視点に立ったサービスの充実と拡大を図っていきたい」。

組合士資格取得の勉強を通じて自らの立ち位置を確認・理解した飯島さん、今、その理解を「お客様」である会員・組合員組合員へどのようにフィードバックしていくかを模索中である。

